月から来た少女　イナイレ

うむうむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月から来た少女　　イナイレ

【Ｎコード】
Ｎ８５８３Ｙ

【作者名】
うむうむ

【あらすじ】
雷門中学にやって来た転校生　　月影四季菜
彼女にはある秘密があった

月から来た少女　イナイレ

私は月から来た

いつか
かぐや姫のように

帰らなくてはならないのだろうか

やがて
ＦＦＩも終わり
桜の季節がやってきた

円堂達は三年生になっていたーー

円堂　「今年も同じクラスなんてな♪　よろしくな？　（二カッ」

豪炎寺　「あぁ、俺の方こそよろしくな　（微笑」

鬼道　「お前達と一度は一緒のクラスになりたいと思っていた　楽しみだな　（フッ」

ガラガラッ？　ピシャリ？

先生　「お～い　みんな～　席に着け～　？　今日は転入生を紹介するぞ～」

男子ＡＢＣ「　おぉ～！・。・・：＊☆　かわいい女だといいな～？　？」

女子ＡＢＣ　「　えぇ～！！？　イケメン君がいいな～　？　（ってかこのクラスにはすでに鬼道、豪炎寺のイケメンコンビがいるけどぉ（キャァ（≧∇≦））」

男女ＡＢＣ　「　先生、どっちですか～？！！？」

先生　「　女生徒だ、月影、入りなさい！　」

四季菜　「　月影四季菜です…よろしくお願いします」

全員　「……かわい……くない……　（「д」；）ガクッ」

皆にそう思われるのも無理はない
なぜならそこに立っていた四季菜は　真っ黒な
髪をきっちり三つ編みお下げにし、牛乳ビンほどの厚底眼鏡をかけていたからだ
その見た目は　かわいい　からは到底かけ離れていた

先生　「　席は学級委員の近くがいいからな、お？　鬼道の前が空いてるな、月影、あの席へ座りなさい　」

「　はい　」四季菜はそう言うと席まで歩いていった

後ろの鬼道が話しかける
鬼道　「　学級委員の鬼道有人だ、分からない事があったら何でも聞いてくれ　」

四季菜　「　はい…」

豪炎寺　「　豪炎寺修也だ　よろしくな　」
隣の席に座っていた豪炎寺もあいさつをしてきた

四季菜　「…よろしく…」

（　暗い女だなぁ…）鬼道と豪炎寺はもうコイツには自分から話しかける事はないだろうと思った

下校時間　キーンコーン

円堂　「月影ぇ？（＾Ｏ＾）」

四季菜　「はい…？」

円堂　「よろしくなっ　俺、円堂守？　サッカー部のキャプテンやってるんだ？　月影は部活は何か決まってるのか？　よかったら一緒にサッカーやらないか？（ニッ」

鬼：豪　Σ（゜д゜lll）（汗）ゲッ？　マジかよ？

四季菜　「悪いけど、サッカーなんて全く興味無いんで遠慮しときます」

四季菜は愛想笑いもせず淡々と断った

円堂　「？　あれぇ　お前なんっかサッカー好きなんじゃないかな～なんて気がしちゃったんだよね、勘違いだったか、ゴメンな／／／／　まぁでも、いつでも気が変わったらきてくれよな！！」

円堂はそう言うとその場から去って行った

鬼道　（どこがサッカー好きそうに見えるというんだ（―゜―；　やっぱりアイツは天然だな…）

豪炎寺　（本当に円堂のヤツ…　誰でもとりあえず誘うんだから困ったもんだ　俺や鬼道目当ての女とか断るのに大変だったんだぞ？　俺達の苦労も知らないで…）

二人はとりあえずホッとしていた

帰り道ーーー
四季菜は一人考えていた
（アイツ…何で私がサッカー好きだって分かったんだろう……？
フッ　円堂守…か　　どんなヤツなのか少し調べてみるか…
…　　ついでに鬼道と豪炎寺の事も……同じサッカー部みたいだからな）

私がこんな格好をしてるのも
全ては人を寄せつけないため
あぁ　サッカー　やりたいなぁ
でもそんな事したって……私は……

その後
とある数学の授業時間
先生　「この問題はちょっと難しいぞ～　　誰か解ける者？
？……何だ誰もいないのか？鬼道、お前はどうだ？」

鬼道　（学年トップの意地としてここはあざやかに解いてみたいもんだが…）

「すみません、時間をかければ解けそうだと思うんですが…」

先生　「そうか、では月影！　転入生の試練だ（笑）出来る所までやってみなさい」

四季菜　「…はい…」

四季菜は席を立つと黒板の前に行った

そしてチョークを手にしたかと思うと糸も簡単に計算式や数式を書いていった

男子Ａ　「あんな式、習ってね～ゾ？？」

女子Ａ　「間違って書いてんじゃないのぉ？」

皆きょとんとしていた

先生　「おぃおぃ？　その計算式は中学では習わないぞ？　お前どこで教わったんだ？　もっと簡単な式で書いてくれ！」

四季菜　「すみません、失礼しました…」

四季菜はそう言うと全てを消して一から書き直し始めた

鬼道　（全部消すなんて…？　問題の数式も全て頭に入って

いるというのか…？　）

先生　「　ご名答？　良く解く事が出来たな　　よし、席に着いていいぞ　　」

豪炎寺　「　頭はいいみたいだな　」

鬼道　「　ああ、いいライバルになりそうだ　（ニヤリ」

しかし体育の授業ともなると四季菜は全く目立たなかった
球技ではボールにふれる事すら出来ず　陸上なんかはいつも最後の方のタイムだった

豪炎寺　「　あいつ、運動神経は良くないみたいだな　」

鬼道　「　ああ」

だがこの二人の考えは間違っていたことになる

それは放課後のこと

円堂達三人は部活を終え、帰り道を歩いていた

円堂　「　…なぁ、あそこにいるの　　月影じゃないか？　？」

豪炎寺　「　本当だ、あんなとこで何やってんだ？？　」

四季菜は路地の端で一組の親子と話をしていた

女の子　「うぇ～ん！！うぇ～ん！！（泣）」

母親　「あんな高い所に引っかかってはもう取れないのよ、あきらめなさい　〇〇ちゃん」

どうやら女の子は風船を目の前の高い木に引っかけてしまったようだあきらめきれないといった様子でずっとその場から離れない

四季菜　「……おばさん、ちょっとこれ持ってて？？」

四季菜はそう言うと自分の通学カバンを母親らしき女性に手渡した

鬼道　「あいつ、何やるつもりだ…？？」

四季菜はいきなり風船が引っかかった木に登り始めた
そしてあっという間に上の方へたどり着くと引っかかっていた風船を自分の方へたぐり寄せた
次の瞬間ーーーー！！！

一番上から二回転半位のジャンプをして地面に着地した

円・鬼・豪　「…なっ！！！！！！！！！…（驚）」

円堂　「スッゲえええぇー？（（（（；゜Д゜）））））））
あんな高い所からジャンプしたよ…っハハッ！！」

四季菜はだまって風船を女の子に手渡した

母親　「すごい？　本当にどうもありがとうございました？？」

女の子　「お姉ちゃん？　どうもありがとう！！！」
親子は深々とお辞儀をすると歩いて行った
その後ろ姿に四季菜は手を振っていた
鬼道　「運動神経が無いとは思えないな…？」
豪炎寺　「一体どういうことなんだ…？」
円堂　「おぉ～い　！！　月影ぇ～！！」
円堂達は四季菜の元へ駆け寄った
四季菜　「！！　タイミング悪っ　　見られたか……（汗）」
円堂　（目がキラキラ☆　「今のすごかったな？？　やっぱり俺の目に狂いはないっっ！　一緒にサッカーやろうぜ！！」
四季菜　「何度も言うけどそのつもりはない！！　もう私に構わないで？？」
四季菜はその場を立ち去ろうとした
鬼道　「待てっ！」鬼道は四季菜の腕をつかんだ
四季菜　「痛いっ？　離して？？」
振りほどこうとするが鬼道はがっちりつかんだ手を離さない

鬼道　「　お前、何か裏がありそうだな、何故運動神経がいいのをわざわざ隠している？」

四季菜　「　フッ…さすが天才ゲームメイカーさんね、勘が鋭い…」

「　私はあなたの事知ってるけどね　」

鬼道　「　？　…　」

四季菜　「　鬼道有人　…　幼少からサッカーの才能がズバ抜けており影山零治に見出される　その後鬼道財閥の跡取り息子となる　サッカー界において常に冷静な司令塔をこなし天才ゲームメイカーと呼ばれる　但し影山に翻弄された時や妹の音無春奈が関わると判断を見誤る傾向あり　」

鬼道　「　お前…？　どうしてそれを…？　」

鬼道は四季菜から手を離した

四季菜　「　まだ知ってるわよ　豪炎寺修也　同じく幼少の頃よりサッカーの才能を開花させ天才エースストライカーと呼ばれる　鬼道と同じで妹の豪炎寺夕香が関わると冷静さを失う　」

「　最後に円堂守…　幼少期に祖父のサッカーの秘伝ノートを見つけそれ以来サッカーの虜となる　努力は人一倍　それに伴い根拠が無くても人に対し常に信頼をおく　その為信頼をおかれた者は心を開く事とな

り今では多くの者が彼に絶対的信頼を持っている
中でもその二人は特に…ね？　フッ　」

豪炎寺　「　お前…何者なんだ…？　」

四季菜　「　ちょっと調べればすぐに分かる事よ、でも安心して　私はあなた達の邪魔をするつもりなどこれっぽっちもない
ただ毎日平穏に過ごせればいいだけ　だからもう私に話しかけないで　？　」

四季菜はそう言うとそこから去って行った

月から来た少女　　イナイレ　第二章

謎の少女月影四季菜

あいつの正体は一体…？

昨日あのようなやりとりがあったにも関わらず四季菜は何事も無かったかのように授業を受けていた

円堂達も話しかける事は出来なかった

今まで四季菜に目もくれなかった鬼道が今日は後ろの席からじっと見つめていた

鬼道　（左手首が少し赤くなっている…　昨日俺がきつくつかんだから…　何だか少し悪い事したな…

こいつ…よく見ると髪が綺麗なんだな、手も細くて雪みたいに色も白い

少し覗いてるうなじはもっと透明感がある

眼鏡を取ったら、素顔はどんなヤツなんだろう…？）

豪炎寺も同じ事を考えていた

豪炎寺　（こいつ…よく見ると爪の先まですげえ綺麗だな、今

まで気付かなかった　　耳も
真っ白で小さくてかわいいな…
素顔も…見てみたい　）

鬼　：　豪　（はっ？／／／／／／俺は何を考えてるんだ？
どうかしてる？　）

四季菜は二人の視線に気付いていた

四季菜　（マズイ…　二人が私に興味を持ち始めてる　…
）

四季菜　「先生　！！」

先生　「　どうした、月影　？？　」

四季菜　「私、また視力が悪くなってしまって…ここからじゃ
黒板の字が見えないんです　！　一番前の席にして下さい　！」

先生　「そうなのか、う～ん…　一番前の席といっても空い
てないからな～…　誰か代わってくれる人、いないか　？」

前列に座っている女子全員　「　はいっはいっは～～い
！！！？」　手を上げた

「　鬼道君や豪炎寺君とお近づきになれるならっっ？　い
くらでも　？（≧≦）」

鬼　：　豪　（｜＿｜；）…

四季菜　（よしっっ？　）

鬼道　「先生！」

先生　「何だ、鬼道？」

鬼道　「月影には今色々学級委員として教えている最中なんです、彼女がスムーズに学校生活に馴染めるよう、僕も責任を持ってやっているつもりです、視力が下がったと言うならそれに見合った眼鏡を一緒に探しに行ってきます…　なので席はこのままでお願いします（キリッ」

先生　「そ、そうか、分かった（^^;;
　鬼道がそこまで言うならそうしよう
と、いうワケだ、月影、早く新しい眼鏡を買って来いよ」

女子全員　「チェッ？」

四季菜　「学年トップだからって先生も言いなりかよ？
　あ～　やだ、もう」

放課後ーーー

四季菜　「ちょっと！　さっきから何でついてくんのよっ！！」

鬼道　「言っただろう？　新しい眼鏡を一緒に探しに行くって

…　（ニヤリ」

四季菜　「眼鏡なんか買い替えないわよ、視力が落ちたなんてウソなんだから」

鬼道　「やはりな…フッ」

四季菜　「だいたい何で後ろの二人までついてくんのよっっ！！　おかしーでしょーが　？？」

円堂　「えぇっと…あのぅ……えへっ（汗」

豪炎寺　「……（ーー；）」

円堂　「いやぁ俺達、お前の正体気になっちゃってさ（焦）いい加減教えてくれないかな？」

鬼道　「はっきり言おう　まずはお前の素顔が見たい」

豪炎寺　「同じく…」

四季菜　（変態…（＾＾；；　）

円堂　「俺達昨日あの後さ、どうしてもお前の事知りたくて理事長の娘の夏未に頼み込んで調べてもらったんだ、そしたら学校に提出された書類に書いてあったような履歴や経歴は全く無い事が分かったって……全てウソ…なんだろ　？　なぁ、何でなんだ？
俺達で力になれるなら、話してくれないか　？！」

四季菜　「……誰に話しても何も解決しない……何も変わらない、変える事なんか出来ないっっ！！
…ウソをついていんだから私はもう退学ね、
皆さん、さようなら　！！」

やっぱり私にはーー

希望なんか……ないーー

「　待つんだ　！！！」

四季菜　「　／／／／……鬼…道く…／／／／」

円：　豪　「　！！　」

俺は四季菜をとっさに抱きしめていた

鬼道　「　す、すまないっ…／／／／　ついっ？
諦めないで、話してくれないか　？　」

鬼道は四季菜から離れた

お前の心の闇を……俺ははらしたい…

円堂　「　諦めたら、そこで終わりだ
諦めない限り、終わりはない　？　（ニッ」

豪炎寺　「フッ…諦めの悪い所が俺達のモットーだ　？」

四季菜　「　！！！！！　……」

もう一度……

あがいてみても

いいのかも知れないーーー

私は心を決めた

四季菜　「話しを聞きたいならついてきて」

四季菜は細い路地に入ると二つ目の角を曲がった

円堂達はすぐ後ろを歩いて行った

しばらく歩くと一軒の家の前まで来た

円堂　「ここは？」

四季菜　「私の家よ　　遠慮は要らないわ、上がって」

円：　鬼：　豪　「お邪魔します？」

四季菜　「　そんな大きな声で挨拶したって誰も居ないから」

円堂　「　家族は？出かけてるのか？　」

四季菜　「　父親は亡くなった…　　母親は仕事で海外にいるし兄弟も居ないから私一人よ　」

鬼道　「　結構広い家だな、ここにお前一人だけで住んでいるのか…？　」

玄関からリビングへ続く廊下の壁には使い古しのサッカーボールがネットに入って掛けられていた

見た所ドアがいくつもあり部屋数は多そうだ

豪炎寺　「サッカーボール…これ、お前のか？　」

四季菜　「　（コクン…）　　昔はやっていたからね　」

鬼道　「　幾つ部屋があるんだ？　」

四季菜　「　八つ……でも実際使ってる部屋は半分だけ…母がこっちに戻った時に使う二つと私が使っている二つ　」

円堂　「　あれ？　　ドアが開いてる、この部屋は？　　」

四季菜　「　あぁ、そこは私のアトリエよ　　絵を描くのが好きなの　」

鬼道　「　水彩画、それに油絵もあるな？　　どれもすごいな…？　　これだけのものが描ければ賞も総ナメだろう？　　」

四季菜　「　コンクールに出した事は一度も無いの…だから賞なんて何にも取ってないわ（微笑」

円堂　「　何でこんなに描いたのに出展しないんだ？自分の実力を試したくならないのか？」

四季菜　「　私には時間が無いの　賞なんか必要無い、好きな絵を描ければそれでいいの　」

四季菜はさみしそうな感じで下を向いた

四季菜　「　まぁ、とにかく座って、今お茶入れるから、みんな、冷たい麦茶でいい　？」

円：　鬼：　豪　「　あ、あぁ……」

みんなーー黙って麦茶を飲んでいた

沈黙が続く中、端を発したのは四季菜だった

四季菜　「　さぁて、何から聞きたい？　」

月から来た少女　イナイレ　第三章

鬼道　「　聞いたら何でも答えてくれるのか？」

四季菜　「　覚悟は出来てる　」

豪炎寺　「　ならまずは俺から聞く…
お前、どこから来たんだ？　前はどこに住んでいた？」

四季菜　「　私は……月で……産まれたの」

円：　鬼：　豪　「　！！！　つ…月ィ～～～？？　（驚」

四季菜　「　１９６０年代に人類が初めて月面着陸したのは知ってるわよね？
実はそれには続きがあって７０年代、８０年代、９０年代と極秘の国家機密で人類は何度も月に降り立っているの……」

鬼道　「　確かにあれから人類は月に行こうとしていないのには俺としても疑問はあった
だが何故極秘で行っているんだ？　目的は何だ？」

四季菜　「　目的？答えは簡単よ、人類移住計画、まずは科学者から行って地固めをするってわけ…　８０年代からは地下に大型都市まで出来上がったわ
私の両親は二人共ＮＡＳＡに勤める技術者だったの
二人共月に派遣されて月で年月を過ごすうち……恋に落ちた……
そして産まれたのが私ってワケ　」

円堂　「　何で人類が移住しなくちゃいけないんだ？　」

四季菜　「　地球の寿命は限られてる……温暖化によってね、地球が無くなるのはまだまだずぅーっと何百年も先だけどその時に備えていたのよ、でも……」

豪炎寺　「　でも…？何だ？　」

四季菜　「　私が１０歳になるまでは、毎日がとても楽しかった、人口も５００人位に増えて、サッカーチームもあったりして……充実していた、幸せだった

でも私が１０歳になったある日、一人の独裁者が生まれたの、彼に洗脳された人は彼の命令に服従した、洗脳されなかった人もいたけど、彼等が恐ろしくてみんな、言いなりだった……

　大好きだったサッカーも娯楽なんかと禁止された……

そして私が１２歳の頃私の父親が監視の目をかいくぐって地球にＳＯＳを発信したの

すぐに地球から私達を助け出す為にスペースシャトルがやって来た

私達は急いでそれに乗り込んだ

…でも…父は…他の人達を先に乗せる為に…自らが彼等の…盾になって…殺された…

うっ…うぐっ…ひっく…

私と母は…父を残して自分達だけ…うぅぅ…」

円堂　「　そ…んな事が…あったなんて　」

鬼道　「　辛い思いをしたんだな…」

豪炎寺　「何てヤツだ…絶対許せねぇ　！！」

円堂　「月影、自分を責めちゃダメだ　？
お父さんは自らの命を懸けてまでお前とお母さんを守りたかったんだ、助かって欲しかったんだ　？　きっとお父さんはお前が落ち込むのを見たくなんてないはずだ　？　そうだろ　？」

鬼道　「　俺もそう思う　」

豪炎寺　「　ああ　？　お前は父親の分まで幸せにならなければだめだ　？　」

四季菜　「みんな……ありが…と…」

私は涙を拭いた

「　でも私は幸せになる事は出来ない…」

豪炎寺　「　？　何故？　」

四季菜　「　月から逃げ出すあの時……あの男は言ったのーーー私が１５になったら迎えに行くと……
私はきっと逃げられない……どこにいてもあの男は私を見つけ出す……
怖いの…毎日が…こんなに変装して、世界中を逃げ回っていたのに…何をしていてもあの男の言った言葉が頭から離れない……？？　」

鬼道　「　１５になるのは…いつなんだ…？　」

四季菜　「　あと一ヶ月きったわ…

母は今ＮＡＳＡにいるのーーー
もし月から不穏な動きがあったらすぐに分かるように監視してくれてる
日本ではＪＡＸＡの人が見守ってくれてる

でも…それでも怖いの…
だから、私に未来はない、分かったでしょ？
これが本当の私　」

月から来た少女　イナイレ　第四章

～鬼道の気持ち～

俺はコイツを守りたい
胸から熱い何かが込み上げる
何故こんな気持ちになるのだろう
昔の心を閉ざしていた頃の俺に似ているからだろうか
いや、違う
もっと何か

まさか

恋……？

まさか…な

まだ素顔も見てないっていうのに…ありえない

でもこの気持ちの高ぶりは何なんだーーー？

～豪炎寺の気持ち～

鬼道がめずらしく動揺している
そういう俺もかなり動揺している
コイツをこれ以上悲しませたくない
何とかして安心させたい
何だろうなこの熱い思い

まさか好き…にでもなったとか　？
まさか
そんな事はないだろ
だが
この胸を締め付けられる感じは何なんだーーー

鬼道　「　俺がお前を守ってやる　！！」

豪炎寺　「　俺も守るぜ　！！」

円堂　「　俺達は昔宇宙人と戦った事もあるんだぜ　？？
月だか何だか知らないけど、絶対にお前の事、守ってみせる　！！
！！
もっと信用しろっっ　　俺達を　？　（ニヒッ」

四季菜　「　ありがとう…私…ずっと誰かにそばにいてもらい
たかったのかもしれない…
そばにいる人に…守ってやるって言ってもらいたかったんだ…きっ
と……う、う、うわあああぁん（大泣）」

四季菜は円堂に抱きついた

鬼：　豪　「　？！えっ？　」

円堂　「／／／／／えっ？…／／／／／あの…ちょっと…／／／／」
「お、俺　こーゆーの慣れてなくてさ、ごめんなっっ　（照」

四季菜　「ううん、いいの、こっちこそゴメンね　…」

四季菜は円堂から離れるときちんと涙を拭く為に眼鏡を外した

鬼道　（　もしや素顔…が…）

豪炎寺　（見える…？）

四季菜は三人に背を向けたまま、こう言った

「私の素顔……見たい？」

円：鬼：豪　「あ、ああ、もちろん！！」

四季菜　「…見せてもいいけど、ひとつだけお願いがあるの」

鬼道　「何だ？」

四季菜　「私の事……好きにならないって約束して」

円：鬼：豪　「……！！！！……」

四季菜は三人の方に向き直った

大きく開いた漆黒の瞳　中心は宇宙の青さのように無限の奥深さがあった

長いまつ毛は瞬きする度にふわっと揺れ、より一層魅力的にするのであった

バランスのいい鼻、愛らしいピンクの唇

この世の者とは思えない程の美少女だった
美しかった
鬼道も豪炎寺も自分の心がとろとろに溶けていくのを感じた
鬼道　「　まさに　かぐや姫だな　」
豪炎寺　「　支配者が狙うのも無理はないな…」
だが四季菜に言われたんだ、惚れるなと……
四季菜は分かっているんだ、自分には男を虜にしてしまう力があるのだと…
俺達はこの気持ちを抑えなければならない
鬼道　「　お前は今日から俺達の…仲間だ　？？」
豪炎寺　「　俺にとってもお前は大事な仲間の一人だ、仲間の事は必ず守る　？？」
胸が…締め付け…られる
息をするのが…こんなに…苦しいなんて
だが俺達は…仲間として…お前を守る　！！

月から来た少女　イナイレ　第五章

鬼道　「　月影、悪いが電話を借りるぞ　？　」

四季菜　「あ、うん、どうぞ？　」

鬼道は別の部屋へ出て行った

円堂　「　月影、良かったら…今から河川敷にサッカーしに行かないか??」

「　人生前向いて歩いて行こ～ぜ☆！」

四季菜　「　うん、そだね…」

私はまだまだ不安が一杯渦巻いてるけど、でも円堂君達に支えられる事によって新たな一歩を踏み出せそうな気がする……

立ち止まっていては…ダメだ…

今を精一杯生きよう

鬼道　「　すまない、　待たせたな　」

円堂　「　どこに電話してたんだ？」

鬼道　「　父さんと話した後　引越し業者にも連絡していた　」

豪炎寺　「　引越し業者　？　」

鬼道　「ああ、　俺は今日からここに住む　？」

四季菜　「？？　えええええぇっっ？？　なっ何言ってんの？？」

鬼道　「　俺は本気だ、一緒に居れば何かあってもすぐに駆けつけられるだろう？
使っていない部屋もたくさんあるみたいだしな、後で業者が家具を運びに来るから☆　」

四季菜　（さすがは金持ち息子、電話一本でどうとでもなっちゃうのね～（＾＾；；　）
「でもいくらなんでも一つ屋根の下に他人の男女はマズイ…んじゃないかな…？　」

鬼道　「それは気にするな、何故なら俺とお前は　仲間、なんだろ？　（ニヤ」

四季菜　「　何かさっきの事を逆手に取られてるような気がする…／／／／」

でも、きっと何もしないよって…事だよね？

鬼道　「お前達はどうするんだ？　」

円堂　「うちは…多分…母ちゃんに許してもらえねぇな（＾＾；；　」

豪炎寺　「　俺も厳しいな…」

鬼道　「そうか、残念だ　（ニヤニヤ」

四季菜　Σ（゜д゜lll）（　だから最後のニヤニヤ何なんだって……？）

円堂　「　鬼道、親父さんに…何て言ったんだ　？」

鬼道　「　全力を尽くして守りたいヤツがいるって言ったら理解してくれた　」

今のって…仲間だからって事だよね？

てか私馬鹿なんじゃない？

期待しなくていいように自分から

予防線を張ったのにーーー

円堂　「よぉ～し、じゃあ　河川敷、行くか　？　」

四季菜　「　行こう？？☆　」（変装してかなくっちゃ？）

～河川敷～

円堂　「　ようし、月影っっ　　思いきり俺に向かってシュートして来い　！！！

お前の全てを受け止める　！！」

久しぶりだな、ボールに触れるの…
そうそう、この感覚…
蹴り足に力が宿って行くような、この感じ
右足にどんどんパワーがみなぎってくる

……

今だ　！！！！

ドゴオオオオオオオーーーッッ！！！

円堂　「　ゴッド…キャッチ…Gファイ…
うわあああああぁーーーっっ」

豪炎寺　「　なっ？」

鬼道　「　ゴッドキャッチが…破られた…だと？」

円堂　「うはっは　？　すごい威力だった…
やっぱりお前はスゲーよ　！
なぁなぁ、必殺技とかあんのか？　やっぱり　」

四季菜　「　必殺技は……ないっ！！」
円堂　ズルッ↑ズッコケた音
「　ま、まぁいっか、十分威力あるからな　」

鬼道　「　次は俺達からボールを奪ってみろ？」

四季菜　「分かった、行くよ？」

豪炎寺が最初にドリブルを始める

四季菜が前をふさぐ

前からボールのある右側へとまわる

豪炎寺　「フッ　　甘いな、」

豪炎寺は四季菜と反対側にいる鬼道にパスを繰り出す

豪炎寺　「鬼道　？」

ズバッ！！

豪：　鬼　「何ィ　？」

何と四季菜は瞬時に鬼道のいる方へと移動していたのだ

そして鬼道に渡るはずのパスを見事にカットしていた

鬼道　「　もらったーー？？」

鬼道が素早くスライディングをしてきた

四季菜はギリギリのところでボールをヒールで跳ね上げ、ヘディングで円堂の前まで来た

胸でボールを拾うと落ちて来たボールにそのまま回転かけシュートの態勢に入った

四季菜　「行くよ？円堂君！」

円堂　「よし！　来い　！」

四季菜は大きく、高く足を振り上げた

そして、大きく蹴り上げた

円堂　「うおおおおぉーーー……ぉ？」

円堂は大きく右に飛んでいた

それを見た四季菜はニヤリと笑い軽く左にフェイントを入れた

ボールはゴールへと静かに入って行った

円：　鬼：　豪　「参りました？」

四季菜　「宇宙人をなめんじゃないよ？（笑）」

鬼道　「じゃあそろそろ、俺達は帰るぞ、家具が来るからな
行くぞ、月影っ」

円堂　「楽しかったな、またサッカーやろうな？　月影っ？？」

豪炎寺　「変なコト、すんなよな／／／／？」

四季菜　「だっ大丈夫だからっっ／／／／／じゃあね」

四季菜と鬼道は四季菜の家に向かって歩き出した

何か不思議

守ってくれる人がそばにいるだけで

こんなにも落ち着くなんて

何年振りだろう、この安心感

不安が全部消える事はないけど

氷の世界に突然現われた小さな炎

世界を溶かせるワケではないけど

近くに居ればあたたまる

例えていうならそんな感じ

ありがとう、鬼道君、

背中が頼もしく見えるよ

月から来た少女　イナイレ　第六章

～四季菜の家～

リビングのダイニングに座る四季菜とはす向かいのソファに座る鬼道

四季菜　「ホントにここに住むつもり？」

鬼道　「でなければ今ここにいないさ」

♪　ピーンポーン　♪

業者　「○○運送です？」　ガチャッ

鬼道　「来たな！

ご苦労様、案内する部屋に運んでくれ」

四季菜　「……っっ？

私の隣の部屋？　奥の部屋の方が広いって？」

鬼道　「何かあった時すぐに駆けつけなければ意味が無いだろう？」

四季菜　「それは…そうだけど…　（寝る時も薄壁一枚だけなんて…　／／／／　意識しちゃうじゃない　／／／／／）

っていうか、ベッドでかっ？　…もしやキングサイズ…？」

鬼道　「当たり前だ、何か可笑しいか？」

四季菜　「　（＾＾；；　　いえ、何も……」

運ばれたのは馬鹿でかいベッド、クローゼット一式、勉強机、書庫などだった

へぇ

インターネットで済まさず、きちんと本を読む人なんだ

さすがは学年トップ

引越しの片付けが終わった

鬼道　「　こんなに遅くなってしまったな、

何か飯でも作るか　？」

四季菜　「あ、私が作るよ！　　（一応女の子だし）

鬼道君はお風呂でも入って来て」

鬼道　「…ならその言葉に甘えて遠慮なく」

鬼道は身支度を済ませるとバスルームへ向かって行った

四季菜　「よし、あとサラダを盛り付ければ出来上がり♪」

♪　ピーンポーン　♪

こんな夜遅く誰だろう？

四季菜はインターホンの受話器を取った

四季菜　「…はい、どちら様ですか？」

豪炎寺　「……俺だ…」

四季菜　「豪炎寺君？？　あ…今開けるからちょっと待ってて？」

豪炎寺　「ああ、」

四季菜は玄関のドアを開けた　ガチャッ

目の前には大きなスポーツバッグを持った豪炎寺がいた
ジャージから着替えてきたらしく私服の白パーカーにオレンジの上着を羽織っていた
シャワーも浴びて来たのだろう、栗色の髪は少し濡れており、外の風に乗ってシャンプーのいい香りがしていた

四季菜　（私服姿もやっぱりカッコいい……さすがは学年一のモテ男／／／／）
「どうしたの？　こんなに夜遅く……それに、その荷物は　？」

豪炎寺　「……その…俺もここに住む…から　…」

豪炎寺は顔を赤らめて言った

四季菜　「／／／／／／えっ、えっ？　何で豪炎寺君まで？　いいって！！マジで！！」

豪炎寺　「俺はお前を守ると決めた、これは俺の気持ちの問題なんだ　！　　邪魔するぜ？　　」

豪炎寺は勝手に靴を脱いでリビングまでスタスタ歩いて行った

四季菜　（ここ……私の家なんですけど…（＾＾；；　勝手にそーゆーの、きまっちゃうんだ）

豪炎寺は鬼道の向かいの部屋を指差しーー

豪炎寺　「この部屋借りるぜ？　　寝床はリビングのソファでいいから…　お前、飯作ってたのか？」

四季菜　「あ、うん、　　豪炎寺君はご飯食べた？」

豪炎寺　「　ああ、食って来た　でもお前の飯、うまそうだな、少しもらっていいか？」

四季菜はすごく嬉しくなった　料理を人の為に作ったのは初めてだった　ご飯を食べて来たにも関わらず　豪炎寺は食べたいと言ってくれたのだ

四季菜　「じゃあ、あとサラダを盛り付けるだけだから、待ってて？」

豪炎寺　「それだけなら俺がやってやるから着替えてきたらどうだ？」

四季菜　「　ありがとう、優しいんだね、豪炎寺君…」
豪炎寺　「　／／／／　礼を言われる程の事じゃないさ　」
四季菜はエプロンを外すと自分の部屋へ入って行った

～　豪炎寺の気持ち　～

女のエプロンって何かいいな…
死んだ母さんを思い出す

やっぱり鬼道と二人暮らしなんてさせられない
彼奴には隠れ悪魔がいるからな
何をしでかすか分からない

支配者からも鬼道からも俺が守らなければ

俺は四季菜を
愛している

その気持ちが確信に変わったのはあいつの
瞳を見た時だ

自分の存在全てがあの宇宙のような瞳の中に吸い込まれてしまった

息が止まるかと思った
それ位、衝撃的だった

あいつが俺のものにならなくてもいい
俺はただ
あいつという存在を守りたい
それだけでーーーいいんだ

月から来た少女　イナイレ　第七章

鬼道　「！（◎_◎；）豪炎寺、お前ー　何故そこにいる？」

バスルームから戻った鬼道は豪炎寺の姿を見て少し驚いている

豪炎寺　「フッ　お前だけじゃ頼りないからな、俺も泊まり込む事にした」

鬼道　「……親父さんには何て言ってきた」

豪炎寺　「臨時の強化合宿だって言って来た　ああ、お前んちに世話になる事にしてあるから★」

鬼道　「俺の事が気がかりで来たんだろうが、お前の方が意外にズル賢いんじゃないか？★（ニタ」

豪炎寺　「お前には負けるさ★（ニヤ」

四季菜　「お待たせ！

豪炎寺君、サラダ出来た？あ、鬼道君もお風呂から出たんだね？」

豪炎寺　「出来てるよ」

鬼道　「豪炎寺が居たのにはびっくりしたよ、まあ　経緯は聞いたから……さ、飯食うか？」

四季菜　「食べよう♪　食べよう♪　お腹すいた～　（＾○＾）　いっただきまぁす☆」

テーブルにはチキンの照焼き、マカロニサラダ、きんぴらごぼう、ほうれん草の炒め物　などが並ぶ

豪炎寺　「（＊＾o＾＊）　美味い！！」

鬼道　「あぁ、金を払ってもいい位　美味いぞ」

四季菜　「美味しいなんて言ってもらえたの、初めて…すっごく嬉しい　！」

豪炎寺　「月影って何でも出来るんだな、苦手なものとかあるのか？」

四季菜　「……ある…」（＾＾；；

鬼道　「何だ、それは？　」

四季菜　「歌が……苦手なの…その…音痴で…＼（／／∇／／）＼」

鬼道　「歌ってくれないか？　絶対笑ったりしないから　」

テーブルにひじを乗せ組んだ手にあごをのせながら四季菜をじっと見つめる

豪炎寺　「俺も聴いてみたいな？　俺からも頼む　笑ったりしないさ　」

しばらく考えてから
四季菜　「……　ちょっとだけだよ？　絶対笑わないでよ？　」
鬼：　豪　「　あぁ？　（＊＾＾＊）　」

姿勢を正す
四季菜　「　コホン…行きます、私の好きな曲
当ててね　？
こぉ…～なぁ…ゆきぃ～…まぁう～…きぃ…せぇつはぁ～…＼（／／∇／／）＼　いっ以上です？？」

鬼道　「……　さっぱり分からないな、どうしたらこんなに下手に唄えるんだ…（汗）」

豪炎寺　「　予想越えだったな……（汗）」

四季菜　「　笑わないで、とは言ったけどそんなに酷評しなくても良くない？　　グスン（泣）
レミオロメンの粉雪…だよぉ（Ｔ　＾　Ｔ）」

鬼道　「　すまない、だが月影はもう歌わない方がいいと思うぞ　」

豪炎寺　「　同じく」ウンウン、
「何でその曲が好きなんだ？」

少し拗ねた顔をしながら
四季菜　「　月には雪なんてなかったから…地球に来て初めて雪

を見て、感動して大好きになったんだ　　そ
れだけ！」
四季菜はすごく楽しそうに笑った

〜　鬼道の気持ち〜

本当に愛らしいな、一言言葉を交わすだけでますます好きになって
行く

今は眼鏡をしていて瞳が見えないけれど
その顔すらとても可愛らしい

俺はお前の虜だーーー

誰にも渡したくない
たとえ豪炎寺であろうと
だが自分でも壊したくない
それほどにお前をーーー
愛してしまっている

まるでかぐや姫ーーだな
皆かぐや姫の虜になった
だが絶対に月には帰さない
絶対にーーまもって見せる

一目姿を見た皇子達は

月から来た少女　イナイレ　第八章

お風呂も入り終わり
四季菜　「じゃ、寝ますか？」

鬼：　豪　「あぁ、おやすみ」（風呂上がりの姿めちゃかわいい／／／／／！！！！）

豪炎寺　「鬼道、お前のベッド一人で寝るには広過ぎるな、俺も一緒に寝てやるよ★」

鬼道　「お前、見張る気だな？
まぁソファじゃかわいそうだからな、
じゃ、行くぞ」

四季菜　「あの二人…過ちがなきゃいいけど（・_・；
さっ寝よ♪」

四季菜は久しぶりにグッスリと眠れた
隣に異性が寝てる…なんてことも全くお構いなしにーーー

次の朝

鬼：　豪　「起きろ、月影　？？」

四季菜　「ふわぁぁ……ってΣ（゜д゜lll）
お、おはよう…」

鬼道　「　俺達サッカーの朝練があるから、もう出るぞ？
お前ももう起きないと、遅刻するぞ？　　」

豪炎寺　「　理事長の娘の事は何とかなるから気にするな　？
じゃ、行って来るな　　」

四季菜　「　あ、ありがとう…行ってらっしゃい（・◇・）／~~」

ふぁぁ…　　多分寝顔、ばっちり見られてんだろうなぁ（恥）／／／／

でも何年振りだろう…朝まで一度も目が覚めずに眠れたの
昨日起きた事は夢じゃなかったんだ
友達ができた事
守るって言ってくれた事
側に居てくれる事

なんか、すごく幸せ…

そうだ、昨日疲れちゃってお母さんにメールしてなかった
さっそく報告しなきゃ
男の子と暮らすなんて許してくれるかなぁ？
でもお母さんにウソはつきたくない…
正直に言おう

ふとダイニングテーブルに目をやると手作りのお弁当が置いてあるのに気が付いた
中を見てみるとミートボール、ほうれん草とコーンの炒め物、ミニトマト、そして少し形のくずれた卵焼きが入っていた

四季菜　「　クスッ　　頑張って作ってくれたんだ？」
四季菜は目にたくさん涙を浮かべてお弁当を強く抱きしめた

鬼道　「　お前、俺と一緒の事考えてるだろ？」
豪炎寺「　…さぁな…？　」
鬼道　「　フッまぁいい…」

まるで天使みたいだったーーーーあいつの寝顔ーーー

一時限目のチャイム♪キーンコーン♪

先生　「　月影はまだ来てないのか？　誰か知ってる者いるか？」

鬼道　「　先生すいません、月影から今日は遅れるって連絡を預かっていたのに僕が伝え忘れていました」

先生　「　そうか、ならいい、分かった　　では授業を始めるぞ」

豪炎寺　「　ボソ…そんな事言ってなかったぞ」
鬼道　「　あぁ、何しているんだ？あいつ…」

～授業の終わり頃～
ガラガラッ

四季菜　「すいません、遅れましたハァハァ…」
先生　「連絡は来てたんだからそんなに焦らなくてもいいぞ
　席につきなさい」

四季菜が席につくと
鬼道　「ボソ…あまり心配させるな」

豪炎寺　「ボソ…何かあったのかと思って　生きた心地がしなかったぞ」

四季菜　「…ご、ごめんなさい…／／／」

本気で心配してくれて…何か嬉しい

～休み時間～
鬼道　「何故遅れた？」

四季菜　「昨日の事を母にメールしてたら時間かかっちゃって…」

豪炎寺　「…で、どこまで報告したんだ？」

四季菜　「……全部…」

鬼：豪　「ぜ…全部？」

豪炎寺　「おふくろさん、何て？」

四季菜　「…大丈夫だった…家に二人も男の子がいるからな鬼に金棒ね、って」

豪炎寺　「鬼はお前だな…クスッ」

鬼道　「（怒）ずいぶん物分かりがいいんだな」

四季菜　「…それと…」

鬼道　「何だ？」

四季菜　「…その…」

豪炎寺　「（^ー^）ゞだから何だ？」

四季菜　「これは大事な事だから必らず言うようにって念を押されたんだけど……
H禁止だって／／／／？」

鬼：　豪　「／／／／／！！！？／／／／／」

鬼道　「あっ当たり前だ？　俺達は仲間なんだから？」

豪炎寺　「そっそうそう？」

四季菜　「そっそうだよね？私もそう言ったんだけど……何せこ

の事をちゃんと言うのを条件に同居を認めるって言うから……ごめんね、忘れて」

円堂　「　月影っ」

四季菜　「　円堂君、昨日はどうもありがとう」

円堂　「　何で鬼道も豪炎寺も顔が赤いんだ？
あっそれより夏未に話したんだ、大丈夫、信頼出来るヤツだからさ、ボソ…経歴が違うのも納得してもらえたから」

四季菜　「　ありがとう…円堂君　　おかげで退学にならずにすんだよ」

鬼道　「　彼氏の頼みなら夏未も断れないよな～？（ニヤ」

四季菜　「　円堂君、そうだったの　？（　▽ー）　　ヒューヒュー　♪　」

円堂　「　／／／　何だよ？鬼道？　　俺と夏未はそんなんじゃないって＼（／／▽／／）＼」
「　で、月影、サッカー部入らないか？今日から」

四季菜　「　でも他の事情を知らない人に色々取り繕うのも大変だから…部活は遠慮しとく
また昨日みたいに時々相手してくれればそれでいいからさ、」

円堂　「　分かった、何かあったらすぐ言えよ　」

四季菜　「　ありがとう　」

円堂は自分の席に戻って行った

四季菜　「　鬼道君、豪炎寺君、」

鬼：　豪　「　何だ？」

四季菜　「　お弁当、ありがとう　♪　　卵焼きはどっちが作ったの　？」

豪炎寺　「　鬼道だよ、俺ならもっと上手く作れる
　　俺がやるって言ってんのにこいつ、自分でやるって聞かなくてさ　　よっぽど四季菜に食べてもらいたいみたいだぜ　★」

四季菜　（＾＾；；（何か黒い星が出てるような…）　「　鬼道君、頑張ったんだね？　　ありがとね　」

鬼道　「　卵焼きってのを一度作ってみたかっただけだ、勘違いするな…」

四季菜　「　分かってますって　（＾O＾　　カワイイ）でもさ、お弁当三つ作ったって事はみんな一緒のおかずなんだよね　？　」

豪炎寺　「　ああ、」

四季菜　「　私は一緒に食べないからいいけど二人は何故おかずが一緒なの？ってなるんじゃない？」

鬼道　「　実はそれを狙って作った　★」

豪：　四　　「　どういう事　？」

鬼道　「　俺達にフラグがたてばやかましい女子が寄って来なくなるだろう　？言わば虫除け…だ　」

豪炎寺　「　だからって鬼道と俺かよ、せめて風丸とにして欲しかった　★

ま、俺も虫除けはしたかったんだ、その話、乗るぜ　」

四季菜　「　モテ男はすごいなぁ……」

～夜　六時　～

鬼　：　豪　　「　ただいまあ　！！」

四季菜　「　おかえり～　　部活お疲れ様、ご飯にする？　お風呂にする？」

髪を下ろしている、眼鏡も外している

な、なんて可愛いんだっ　！！

ぎゅう／／／

豪炎寺　「…鬼道、お前、何で四季菜に抱きついてんだ…？　」

鬼道　「…だだいまの…ハグだ…ただの　」

俺とした事が…うっかり抱きついてしまうとは…

鬼道　「／／／　風呂にする　　練習で体が火照ってるから、早くシャワーを浴びたい　」

四季菜　「／／／　分かった　／／／　」

四季菜まで赤くなってんじゃねーか…

くそっ鬼道のヤツ…　　今まで以上に要注意だ

豪炎寺　「　俺も一緒にシャワー浴びるかな、じゃ、行こうか、鬼道クン　？　」

鬼道　　（豪炎寺のヤツ、相当怒ってるな（＾＾；；）

～　バスルーム　～

体を洗いながら

鬼道　「…何だよ？　　まださっきの事怒ってるのか　？」

湯舟に浸かりながら

豪炎寺「　当たり前だ、月影が勘違いしたらどうする？」

鬼道　「　俺の方に向いてくれたらそれに越した事はない　」

豪炎寺　「あいつは自分の誕生日までのカウントダウンに毎日怯えているんだ、今は恋愛どころじゃない、お前だって分かってるだろう？　今はちょっかいを出すべきじゃない」

鬼道　「……そうだな、分かった…気を付けるよ」

豪炎寺…　お前も相当月影に本気なんだな

～　リビングにて　～

鬼道　「今日の飯も美味かったぞ、ごちそうさま、洗い物は俺達がやるから」

豪炎寺　「月影はゆっくりしてくれ」

四季菜　「じゃあ私みんなの洗濯物しまって来ちゃうね？」

豪炎寺　「そんなの後で自分達がやるからいいぞ、少しは休んでろよ？」

四季菜　「私　何もしないのって苦手なの、一分一秒でも時間がもったいなくて…だから、しまって来る」

豪炎寺　「あ、あぁ」

一分一秒でも…か、いつも気が安まらないんだな
かわいそうに

洗い物も終わり、三人はソファでくつろぎながら話しをしていた
二人がけのソファに鬼道と豪炎寺、一人椅子に四季菜

四季菜　「　フラグは作戦通り立ったの？…クスッ」

ブラックコーヒーを飲みながら
鬼道　「　一気に広まったよ、俺達への注目度はハンパないな　」

カフェオレを飲みながら
豪炎寺「　だめ押しに帰り鬼道と手をつないで帰ってやった　　女共が一気にさ～っと引いて行ったな、あれは愉快だった★」

ミルクティーを飲みながら
四季菜　「　本当にそれでいいんですか？…あなた達…（＾＾；；
」

鬼道　「　何言ってんだ？　　その方が月影だって他の女に嫉妬されなくて済むだろ？」

もしかして、私のため？だとしたらそこまでしてくれるなんて…めちゃくちゃ嬉しいんですけど…

四季菜　「　二人ともありがと…大～好き　？？」

四季菜は二人に抱き付いた

鬼：　豪　　「　　／／／……！！」

四季菜　「やっぱ仲間って…サイコーだねっ　♪」

鬼：　豪炎寺　「ん、あぁ…」

あぁ、なんていい香りがするんだ、俺達と同じシャンプーを使っているはずなのにさらにいい香りがしてくる

／／／／　ぎゅううっっ　／／／／／

二人はここぞとばかりに四季菜を強く抱きしめた

四季菜　「バタバタッ！　苦しいよぉ…二人ともっっ」

鬼：　豪　「ゴメン…　／／／（満足気）」

豪炎寺　「明日は久しぶりの休みだな、練習もないし、どこか行かないか？」

四季菜　「私はちょっと用事が…」

鬼道　「何？　どこに行くつもりだ？」

四季菜　「午前中は美容院に行ってこようと思って」

豪炎寺　「……その髪…切るのか？」

四季菜　「うん、バッサリと」

鬼道　「そんなに綺麗な髪、切るの勿体無いな、何故切るんだ

？」

四季菜　「この髪は地球に来てから伸ばし始めたの…言わば生きる気力を失くしてた私の象徴みたいなもの…
でもあなた達が私に生きる力を与えてくれた、だからバッサリ切って気持ちを新たにしたいの」

鬼道　「……なら反対は出来ないな、フッ」

豪炎寺　「午後も用事があるのか？」

四季菜　「学校からの帰り道　街を見渡せるちょっとした丘を見つけたの、そこに行って風景画を描こうと思って」

鬼道　「…公園を通り過ぎた辺りか？」

四季菜　「そう、そこ？」

豪炎寺「フッ　街を見渡したいならもっといい場所があるぜ」

四季菜　「本当？　どこか教えて？」

豪炎寺　「明日連れてってやるよ、鬼道も行くか？」

鬼道　「俺はいい、明日は自分の好きな事をするさ、」

豪炎寺　お前が月影と二人になっても大丈夫か、試す

鬼道、俺を試す気か…？

四季菜　「じゃあ明日美容院が終わったら一回帰って来るね　？」

豪炎寺　「　ああ、待ってる　」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8583y/

月から来た少女　イナイレ

2011年11月28日04時53分発行